慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	サン・シモンの宗教論:Nouveau christianismeと彼の晩年			
Sub Title				
Author	小泉, 順三			
Publisher	慶應義塾理財学会			
Publication year	1931			
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.25, No.3 (1931. 3) ,p.418(114)- 460(156)			
JaLC DOI	10.14991/001.19310301-0114			
Abstract				
Notes				
Genre	Journal Article			
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19310301-0114			

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

モンの阿宗

-Nouveau christianisme と彼の晩年

我心前題去說為整修行之方於、世古地市然

上八二五年に、サンドシモジは、彼の最後の著作。新ギリスト教」を書いた。

サン・シ馬との思想には影像に二名の傾向が平行して居った。誰しい。其二つは、實證的科學的傾向

教を確立する事を彼に要求して居った。 學的格律を立てさせた。然るに後者の殆んで神に似た彼の感情は、言葉の完全な意味に於ける一宗 前者は、彼をして質證科學の完成に努力せじめ、遂に萬人は勢働すべしと云ふ純然たる質行的科

立と排除、これが兩者の間に存する關係のすべてである。 科學と宗教、この二要素は最も融和し難いものである。永久に融和し難く見へるものである。

果して、我々は、 彼の著作の殆んごすべてに於て、この三傾向が錯亂して述べられてゐるのを發

見する。

因を有した種子として、この著作の中に包有されて居つたのである。 し、この混亂は未發展のましで彼の頭腦に停滯して了つたのではなかつた。各自、多分の發展的素 彼の處女作である「一デッネーズ住民の書簡」に於てこの二要素の混亂した姿が先づ現れてゐる。然 4000

に於て發展することを止めなかった。 從つて、この二要素は、この時以來引續さ、彼の頭腦に於て、從つて、その表現物たる彼の著作

宗教的要素は常に前者の内部或は背後に、秘やかな成長を續げて行かねばならなかった。 一八二〇年頃までは、兩者の對立に於て、常に科學的要素が表面的優勢を占めて居つた。 從つて

消息を物語るものである。 サン・シモンの科學實證時代、議會政治時代、產業組織時代と稱せらるべき諸時代は、 この間の

一八二五年の「新キリスト教」に於て嚴然たる自己の存在を我々に示すに至づた。 然るに、この最後の産業組織研究時代から、後者が漸く彼の思想の表面に浮上り初めた。そして

の生涯こそは、科學と宗敎の二要素を融合しやうとする烈しい心的闘爭史であると云ふことが出來 我々は、この經過を考察する事によって、彼の生涯を、科學から愛への推移を少む者である、彼

の未解決な對立を解決しやうとする彼の努力の結晶であると云ふ事が出來やう、たとへ、それが完 この「新キリスト教」は、彼の産業を中心とする唯物史観と、智識を中心とする觀念史觀と

(四一九) サン・シモンの宗教論

第三號

全なものでなかった。しても。この外のなり、

シェンの思想體系批判への道を開かうと思ふ。 私は、彼の人類愛的宗教的思想の發達を概觀した後、この「新キリスト教」の批評に移り、 サン・

福新 2 多 多 多 多 等 图 2 字 4 的 第 8 4 4 5 4 5 4

といく證明にならないからである。 何故ならば、彼が偶々祈禱を拒むだからと云つても、彼に全然宗教的感情が養育されてゐなかつた とのみ解する事は不可能であらう。然し、此の事は左して重要視すべき事柄でない事は勿論である。 したと云ふ話が、この證據として我々に提供されてゐる。此の事は疑もなく、單なる小兒の出來心 サン・シモンは早くから傳統的なキリスト教を放棄したと云はれてゐる。彼が、最初の祈禱を拒絕

多の他の事質を有してゐる。 我々は、これと反對に彼の心中に於て、宗敎的感情が可成の勢力を持つて居たといよ事を知る幾

的空想と刺戟を容易に鳳受する性質は、彼をも、叉、この誤謬の中に陷入れる様になつた。我々は ロシャに於る rose-croix 瑞典に於る swedenborgius の興起がそれであつた。サン・シェンの、 彼の友人であるレーデルンが、この illumine であつたのを知つてゐる。人或は次の如く云ふかもし 虚をつくつた。多くの人々は、宗教の代りに迷信に頼つた。フランスに於る illumine, martiniste ア れない、 十八世紀に於るキリスト教の頽廢は、信仰の必要を身にしみて感じて居つた人々の心に大なる字 即ち、 相反する所信或は宗教を有する者が、 反って、 親交を結ぶものであると。

二人が相求むる所に何等かの調和的分子の存して居つた事は否定出來ない。

に生成して居つた事は、容易に推知する事が出來る。 書簡」に於て、彼が神の言葉を狂人の如く説き出してゐるのを想起すれば、宗敎的要素が彼に多分 又、ルクセンブルグの牢獄で彼がシャーレビンの出現を物語つてゐる事や、コーデュネー ブ住民の

あった(誰こ)。 としての僧侶に代り、宗教が科學の上に基礎を当くと云ふのが、この著に於ける彼の思想の大要で 的道徳的原理の最初の崩芽か包含されて居つた事は重要な事質である。そして、學者が精神的權力 「一・デーネーブ住民の書簡」に於る彼の思想には、純粹な迷信の結果ばかりでなく、既に彼 の實證

然し、我やは、その中に一つの新宗教思想が誕生してゐるのを認める事が出來る。

てゐる。 はない、一種の半諷刺的、半架空的夢想であるが、ともかく、そこには彼の最初の宗教思想が現れ この著の最後に於て、彼が神の示顯を語ってゐる時、確定した形をとって整然と現れてゐるので

ならば名づける事が出來やう。ニュートンを中心として一切が計畫されてゐる。そこには、 科學及藝術の進步を妨害するものに與ふべき様に築造されるであらう」。近住の弟子達には、毎年ニュ そこに書かれてゐるものは、未だ科學的な一教閣にすぎない。謂はゞニュートン教とも名づける ンを祭つた靈廟があって、「其建物の一半には、永遠なるものに委ねられた住居であると云ふ感を ンの墓に参詣する義務があつて、之れに違反するものは教敵と見做される。そして、 この宗教 = 7

の大司教は、當然、ニュートンの墓に合葬される權利を有してゐる。

て真面目に考へられる様になった見戯だったのである(誰三)。 と見做すであらう。事實、それは見戯にすぎなかった。然し、それは、後には、彼の後繼者によっ この著によって詳細に彼の考を讀んだものは誰れでも必らず、直ちに其考を見戯にすぎないもの

すべきものであると云ふ事を、我々に示してゐるのであつた。 シ・シェンの心中に、暗默の中に深い根を下ろして居つたと云ふ事を示すものである。そして、同時 思ふに、彼の處女作に於て全然空想的なこれらの思想が發表されたといふ事は、宗教的思想がサ は、他のより華々しい思想によって息の根を塞がれて居たけれごも、何日かは再び其姿を現

的萠芽の痕跡を發見する事が出來る。 「一デーネーブ住民の書翰」以後、我々は、求めて歩るくなら、そここ人に於て、 宗教思想の内部

すべての人々によって與へられてゐる誤った宗教觀に對して抗議してゐるのを見る。 一八一一年のド・レーデルン氏宛の彼の書翰の中に、彼がコンドルセーによって、又、十八世紀の

ゐる。尤もこの著は、サン・シモンか、或は其名を借りた他人の手になつたのか、其點は明白でな に於て、其著者は、後にサン・シモニアンが試みた樣に、特確にキリスト教の起源及發展を説明して 又其日附は判明しないが、他の頗る注目すべく、且文體の流麗な斷篇で Naissance du Christianisme 全集編輯者は、其日附を一八一八年と一九年との間に定めうるものとしてゐる。

一 デ (ネー) 岁住民の書翰」に次いで、一八〇七年—八年に出版された「十九世紀科學研究序論」に

於ては、彼の道德の質證化が愈々進んでゐる。

消極的教訓の代りに、「人は勢働しなければならぬ」と云ふ積極的新道德を明示した(註四)。 この書の第二卷に於て、彼は「人の欲せざるところを人に施すことなかれ」と云ふキリスト教道德

のであった。「十九世紀科學研究序論」は、社會改造の新道徳を提案しやうとする彼のその試みの第 一歩を包有するものでもあった。日本の一支の前年一番であり、自然の制制制制の表現であった。 グン·シェンが最初に當面の問題としたものは、宗教に闘すると云ふより、寧ろ、道德に闘するも

然らば、彼の道徳に闘する意見はごうであったか。彼の多くの著作によって概説して見やう。

れて、海に沿ふた堤防を等閑にするのと同様である。「無産者に有産者が對抗しうる唯一の目標はそ 感情を燃やすことを好んでゐる。これは、恰も、オランダ人が、内部の何か小さい洪水に氣をとら 不斷の社會的騒亂を防遏し得る。しかも、世人はこれを等閑に附して、無意義な政治問題のために サン・シェンは云ふ、社會團體にとつて最も重要なものは道徳であると。彼によれば、これのみが はなるとうとない

秀さまで示した賞讃すべき宗教である。何んとなれば、それを採用した國民のみが、その運命が不 「人類の科學に關する覺書」に於ては、キリスト教が如何に文明に對して貢献するところがあつたか **断に改良され、隷屬的制度は次第に緩和され、そして結局疾絶されたからである。『萬有引力研究』** は偉大な、賞讃すべき宗教であった。「他のすべてのものに秀でて、その優秀さを、又その絕對的優 然らば、如何なる道德が現在迄人を支配して居つたか。基督教がそれである。基督教は、今日迄

第三號

と去ぶことが説かれてある。

形を蒙らざるを得なかった。換言すれば、「天上の道德は地上の道徳に移らねばならない。」 然し、現在に於ては殆んご到る所で實證的思想が勝利を獲得した。從つて、哲學的科學も又、變

は、相關的に、人類にも有用である」といふのである。 ち、我々は古代の信仰を出來る丈破壞すると同時に、又新道德體系の樹立を準備しなければならぬ。 たこと、それが有用であった時代は既に我々から遠ざかつてゐることを承認しなければならぬ。 るのは不公正である。又不合理でもあらう。然し、同時に、我々はこの信仰が統治した治世は終つ 新原理とは何か。「人類に有用であるものはずべて個人に有用であり、」上、個人に有用であるもの 我々は、キッスト教が過去に於て、道徳に對して偉大な進步を與へたことは認める。これを否定す

礎を與べるであらう。 かを教へる。かくすれば、二百年以來一歩も前進し得なかつた道德は曖昧な思想から脱するであら うし、道徳學者も、最早、形而上學に惑溺しないであらう。そして、それが公民教育に確固たる基 社會的地位如何に拘らず、如何にせば、各人は自己の特種利益を全體の幸福と結合さす事が出來る そこで、この目的に添ふべき二つの道徳講座が創設されねばならぬ。教師は、そこに於て、自己の

が一揆や暴動を惹起したのは、偏へに彼等の無智なるがためである。サン・シェンは、勞働者の無智 然るに、この公民教育でそ政府當局が最も留意すべきものである。旣成の秩序に對して、 よつで起うた暴動の例としてフラシス革命及、マンチェスター の大騒亂を擧げてゐる 無意者

學的問答によって置換されるべきである。 的紐帯であるからである「駐五)。現在に行はれてゐる何等價値を持たぬ宗教問答は、 **藉の中で最も重要なものである。サン・シモンによればってれは社會のあらゆる階級の間を結ぶ科學** 役立たねばならぬ原理」を包有する國民的宗教問答を編纂するであらう。この宗教問答は一切の書 この公民教育は誰れに委托されるか。これは、精神的權力の占有者、 學士院は「物質世界を支配する重要な法則の要約的教訓のみならず、社會組織に基礎として 即ち、學者に委托されるで ての實證的科

この事に關して次の如き敕命が公布される。

第二條、學士院は公民教育の監督に任ず。國民教理書に於て樹立せられたる原理に反する學校に

第二條、各學派の執行者は彼等の布教に關しては、學士院の指揮に服從すべし。

市民権を行使し得ず、學士院は、この試問の方法及條件を規定すべし。と 第三條、フランス國民は、何人たるを問はず、國民教理書に關して試問を受くる以前にあつては、

事ら彼等の掌中に收めるであらう。 かくして僧侶の職を與へられた學者は、彼等に代つて人民を指導し、支配し、國民教育の要務を

る様に思はれた。 サン・シェンの道徳觀はかくの如きものであつた。そして、暫時の間、それが彼にとつて充分であ

然し、サン・シモンは、 實證的科學の研究によって、換言すれば宗教によらずたゞ理性によっての

第二十五卷 (四二五) サン・シモンの宗教論

導原理を求めやうとしたのには次の如き彼の思想が根柢をなして居つた。 み社會改造を行はんとするものではなかのた。彼が感情よりも科學に多くを訴へ、そこに社會の指

ある。然し、この眞理も次のこの公理よりは勝れて確實なものであるとは云はれない。 社會組織の基礎となつたし、又基礎として役立つものであらう。この眞理には爭論のないところで 彼は一八一○年に一書簡中に共娚ヴィリトルに對してかくの如く云つてゐる。即ち「宗敎は常に

一人間にとつて世の中に確實なものは何も存しない。人間にどっては相關的なものしか存しない。 常に比例するであらう。ご云ふ結論を余は引出す。 常に修正されたじ、又常に修正されるであらう。從つて、宗教は文化の程度と常に比例したし、又常に修正されるであらう。從つて、宗教は文化の程度と常に比例したし、又 この二原理を結合せしめた中から、宗教は常に存在したし、又常に存在するであらうが、然し、

される時には人類は常に科學的道德的及政治的危機にあることを示してゐる。 他の種の考察に移って經驗の關係の下に於て事物を考究しやう。歷史的研究は、宗教觀念が修正

危機は宗教思想に加へられる修正によって決定されることを知るであらう・・・」と。 最後に、現在の社會狀態を考察して、それが科學的道德的及政治的危機の狀態にあること、 ての

一に理性の領域を擴大すること、これがサン・シモンの科學的政治的研究の目的であつたのである。 ばならね。この實證化が完成されて初めて宗教の改正、新宗教の樹立が成就する譯である。故に、第 宗教をして時代の文化に適應せしめんがためには、先づ、政治、道徳の諸科學を質證化しなけれ 故に、この方面に關する彼の思想が完成されて、彼の見解が擴大されるに從つて、 彼の思想が

を滿足させねばならぬことを知つたのである。換言すれば、宗教的傾向が漸く彼の體系の表面に浮 上つたのである。 には情意一つながら存在してゐること、眞の道德はたべに理性を充足さすべきのみならず、又感情 り以上宗教に傾き、より以上に人類的になつたのは當然の經路であつた。ててに於て、 人間

然らば、それは何時頃からであらうか。

には充分でなかつた事、及び情緒も亦、人類の運命を完成するために必要なる職責をもつて居るこ サン・シモン選集の編者は云ふ、一八二一年から彼は、理性と利益とは大なる社會變革を決定する

めるのが至當であらうと思ふ。 るから、一八二十年頃から彼の思想が、道德から宗教へ、科學から愛へと轉換したものであると認 を「新キリスト教」に求めてゐる。然し上述した如き思想的變化の結果、彼がここに到着したのであ 期の政治産業研究時代に對して、彼の宗教道徳研究時代を指するのである。世人は普通彼の第三期 此時以來サン・シェンは確實に彼の研究の第三期に入つた。第三期とは、第一期の科學時代、第二 合うなのと何をおけれるの

「産業體系」には、題詞として、『汝等は互に愛し、互に救べよと神曰へり」と云ふ格律が刻まれてゐ 織を樹立するためには、キリスト教の根本思想たるこの格律を社會のあらゆる方面に貫通させねば る。この格律は常に人間の行為の指導者となるべきものである。故に社會的幸福を保證する社會組 ての一八二二年に彼によって公刊されたものは『産業體系』と「博愛主義者への告解」である。

ならない。サンシュシェンによれば彼の所謂産業的社會制度こそ、神の命ずるキリスト教を實際に體現 した社會の姿であった。

類各自の一切の力を結合する政治體系である。蓋し、これてそ、人間が其境遇を改善し、且諸國民 が、神の目的として示し給へる平和狀態に達し得べき唯一の道である」と。 なのである。故にサン・シモンは云よ「キリスト教は、科學と産業によって自然を證服せんために、人 とは、各自が結合することによって得る生活享樂の利益である。然るに、この結合の手段こそ勞働 げるものこそ頃のギリスト教的社會でなけねばならないからである。人間が結合によつて得る利益 の實際的目的となるからである。他人の有しない物を相互に生産し合ひ、實際に相互扶助の功を學 **これを充足するがための多種の勞働の増加、勞働の増加によって行はれる相互挟助、これがこの社會** 何光でなれば、産業制度の基調である勞働は、博愛から切斷し得ないものである。欲望の増加、

に、或る感情の威嚴が添加されてゐるは明白に看取される。 への一つの道徳的補足以上の役目を行つてゐるものでは決してない事が明らかである。然し、そこ 以上によって考へれば、「人は兄弟の如く愛すべきである」と云ふ題詞は、未だ、從來の彼の學說

調した點については、實際にずつと劃期的のものであった。 この「産業體系」に比較すると、これに附加された「博愛主義者への告辞」の方が、 感情的要素を張

「産業體系」に於て、サン・シェンが説く所は、利己主義は博愛主義を對立してゐる。人類の危機を 前者即ち利害關係は比較的無力である、専ら後者に俟たねばならね。 而して、

ては、彼は初めて人間の感情に理論的訴へを試みてゐる。著しく宗敎口調で本書が認められてゐる後者を前者よりも優れた地位に置くには、「互に人を愛せよ」と述べたのである。然るに「本著に於 のも其故である。

ことにあつた。 する。この布敎による改革の目的は『最大多數の階級に最大限の利益を與へる樣に社會を組織する』 と云よに、「文書と相並んでの口頭による布数」方法である。 の關係と同樣でなければならない。而して、このために如何なる手段が彼等によつて用ひられるか 的感情」である。そして博愛主義者の新教説に對する關係は、宛かも、キリスト教建設に對する使徒 る道德力とは如何なるものであるかを内省した。この力は人類愛主義者によつて指導される「道德 彼はこの著に於て、其目的が基督教を思索から實行へ移すに存る旨を再説し、 彼等は王、産業家、及人民に向つて布教 この改革を行ひ得

た著作の様な觀を呈して居つた(註七)。それは、彼が間もなく再び筆戰に入り、 の續さを書いたからである。即ち「八二二年には Des Bourbons et des Stuarts を書き、更に Sinte して多少の顯著な印象をもたらして居つたけれざも、この『博愛主義者への告解』は、長い間孤立し 彼はこの著に續くものを暫時書いてゐない。從つて、 la brochure des Bourbons et des Stuarts を書いてゐる。 「博愛主義者への告解」は、サン・シェンの道徳世界への第一歩を、しかく明示したものであったが、 この時以來、彼の著述には、この新傾向に對 純然たる政治的著作

次いで一八二三年に、甚だしい落膽に打負されたサン・シェンは、リシュリュー通五四番地の住居

弾丸は彼の右眼を破つた丈で事なきを得た。ドポト゚ドト゚ド でビストル自殺を試みた。この行為の原因に對して、我々は確證を持つことは出來ないが、幸にも

は確かに不合理ではない。 た智力の衰く、及死から奇蹟的に脱出し得た疑る事の出來ぬ事實から彼が受ける宿命的の靈感! し、彼が受けたとするなら一が、彼の心中に何等かの思想的變化を惹起したであらうと推定する事 での行為が彼の精神に甚だしい變化を與へた事は何人でも想像し得る。彼をして自殺に迄引入れ 若

後であると論じてゐる。 從つで世人は、屢々での事件を重要視して、サン・シェンが宗教研究時代に沒入したのはこの事件

から敷はれた事は、彼の心中に新らしい進歩を決定せしめた。この時以來、死に至る迄、彼が公刊 た著作は其特長を示してゐると信じてゐる。 即ち、サン・シモンの後繼者等、殊に、Henri Fournel はその。Bibliographie でいる。主要 に於て、彼がこの負傷

論」に於て、 的傾向を以つて、彼の頭腦の動搖によつて決定された智識的衰弱の結果であると考へた(註八)。 又或る人は、次の如き別の見解を下してゐる。即ち「産業者囘答」の多くの句に於て「文學、 又特に「新キリスト教」の稍々神秘的な或る頁に於て、我々の注意を惹く感情的及宗教

世の宗教明が如まると見るのよ妥當では s。 る。その時以來彼の宗教的素因が我々に明白に映つる樣になつた事も又正し s。 彼の自殺的行為が、彼に宗敎的傾向を甚だからしめた事は、前述した如く確かにありうることで が初まると見るのは妥當で 然し、 その時か

って、 た産業者間答の第一、第二、第三部に於て更に其步を强め、遂に、「新キリスト敎」に至つたのであ の告解して於て最初の轉換を明示しい次法ででは八八二三年の十二月、 共間彼の思想は、すべての著作を一貫して生成して居つたのである。 彼の感情的傾向は「デデーオーブ住民の書簡」に大體の姿を示した後い博愛主義者へ 翌年の四月及六月に公刊され

定的入門を更に著しくしたものであった。 構成するものであると同時に、「博愛主義者への告解」の公刊を第一歩とした道徳世界への著者の決 「産業者問答」の最初の第二冊、第三冊は、ガン・シモンの政治論の最も明白な、最も完全な要約を

書いた實證政治學の説明を訂正し補足するのを目的として居つた。コムトは、人類の進步は次の歴書いた實證政治學の説明を訂正し補足するのを目的として居つた。コムトは、人類の進步は次の歴 聲のあつたコストが、他の著述に於て再び見る事の不可能な程の明智と果斷とを以つて、 して、智識能力よりも、道徳的物質的能力により多く服從する傾向を見せた。 **史的三切、神學時代、形而上學時代、實證的或は合理的時代によつて完成されるものを考へた。そ** 著書の初めに公刊された六つの廚篇から成つてゐる。この第四冊は、第一、第二冊に於て發展し初 めた政治的道徳的原理の説明を繼續したばかりでない、當時プン・シェンの門弟と云ふ名の下に、名 「産業者問答」の第四冊も、特別に注意する價値がある。これは「文學、哲學論」及「新キリスト教」の 第三冊に

發展を示すでの段階は、感情的能力と合理的能力とを全く平等の秤の上に置くサン・シモンにとつて は、「一个トの以上の説は不完成であり、又誤つてゐる様に思はれた。ガン・シェンによれば、この 然るに、同時に結果であり原則であつだとであの歴史的連續を構成するでの方法及人間の能力の

情的能力と合理的能力の結合したものが精神的能力となり、産業的能力が地上的能力を構成するも のであった。 が対するながくないない

示したのである。 業の性質を職責とを示した如く、感情の力と價値を認知した上に、生命のこの方面の性質と職責を の第四冊に於て彼の眞の學説を再び樹立しやうと試みたのである。そして、彼が、以前、科學と産 なる程度に於て、自己の門弟の研究が彼自身の思想から離れてゐるかを立證したばかりでなく、こ 故に、サン・シェンは、「産業者間答」の第三冊の冒頭に掲げた序文によって、如何なる點に、又如何

芽をして存在して居つたてとは明白である。 かく論じて來ると、新キリスト教の中に包有されてゐる思想は、既にサン・シモンの諸著述中に萠

一八二五年にサン・シェンは「新キリスト教」を公刊した。

からであり、たど、後に此等の思想が凝集せられ、より弱められ、且より精確な形式を採つた丈で の仕業ではない。「この時以前、既にそれらの基調、及び重要な諸思想を、多數の章句中に發見する 前述した如く、この著は、或る人々の謂ふやうに、二八二二年の自殺未遂を發せしめた智力衰額

然らば、如何なる形式に於て彼の思想體系が發表されてゐる平、

本書は、ナン・シモニアシに頗る重要視せられてゐる。サン・シモン自ら も其臨終に 當つ て、オラ

7 力あつた一人である。 グにそれを自己の重要な著作として指摘してゐる。 p ŀ 1) は、 本書の完成に與っ

本書は會話體で述べられてゐる。

て發表する意思であったが、これ自體が既に重要なものであり、 しかも直ぐに發表するのを適當と判斷して、これを公刊したのであつた。 ての書を Opinions litteraires, philosophiques et industrilles の第二巻の一部とし 且現下の政治狀態にあつては單獨

時であった。」 瀆の法律が公布され、イギリスに於ては、カトリックとプロテスタンの兩教徒が、互の間に長く繼續 した多難な鈩鬪を打切らうとして其手段を求めてゐる時」であり、「凡ての人々が宗敎心の發動を經 サン・シモンの観るが如くならば、現下の政治狀態は「人々が基督教の眞精神から一層遠ざかり、冒 形態、發達を明確にせんと務め、他面、神學が迷信の重壓の下にそれを窒息せしめんとする 或ひは少くともつ 他人のそれを尊敬する必要を感じてゐる時」又「最も優れた著作家達がその

ての時に當つて、國民や君主達を基督の眞精神に呼戻すこと、「社會に於ける宗教的情緒の發動を 、確にするために努力する」、これがサン、シモンのこの對話、 主要な目的である。 即ち「新キリスト教」に於て提議され

サン・シモンは云ふ

「この書物は、祭式とか教義とかの最大の自由を許しながらも、然も道徳に對しては冷淡な態度を

(四川田) サン・シモンの宗教論

の上に伸べる不断の必要を感じる凡ての人々に對して呼び掛けてゐるのだ。 とらず、道徳を純化し、完成し、これが宗教的性質を保存せしめながらも、 其支配を社會の全階級

居つた諸々の法則、即ち祭式と敬義とに對する優越を把持し、又同時に、祭式と敬義とは凡て信者 びかけてゐるのだ」と(註一〇) の注意を神爲の道徳の上に定めることを目的とするものであることを會得してゐる人々に對して呼 「この著述は、最後に、真に崇高なるもの、神聖なるもの、初期キリスト敎に於て、道德が備へて

くべからざるものである事を認めた。彼は其他の大部分をこれに當てゐる。 以上の見地からして、ナン・シモンは先づい カトリック教、新教、其他のキ リスト教派の批判が缺

彼は、第一に、カトリック教を異端だと云ふ。

傳來のロ ぎない。これを維持する方法も僅かに其狡猾さに訴へる道しかない。精神的な力、道徳の力、 スト教の力、誠質と忠節によつて與へられる力は全く其影を潜めてゐる。「一言にして云へば、使徒 ト教の一部にすぎない」。Cはこ 使徒傳來のローマ法王廳のカトリック派は、共建設者レオン第十世の在位年間から著しく墮落はし 尚有力なものであることは否定出來ない。然し、其勢威たるや、今日では物質的であるにす ーマ、カトリック教は、キリスト教的異端以外の何物でもあり得ない。それは變性せるキリ キリ

彼は サン・シェンは何を以つてカトリック教を異端と云ふのか リック教會に向つて、其異端を彈劾する四箇條を提出して ねる。

第一項目「カトリックの僧 教の道へ導きはしない」。 侶が其教會の衆俗 に與へる教育は悪徳そのものだ。それは彼等の行為を

良さい に当 キリスト教は、 して永遠の生命を約束した。 **ふ事を提議する。** 信者に對して地上に於る目的として、貧者の精神的物質的生活の可及的迅速な改 イエス・キリストは最も熱心に最大多數階級の幸福の増進に盡力する人を

綜覽するがいい。 も改善する事が出來るであらう」。とこれこそ眞實のキリスト教が僧侶に命ずる行爲なのである。 受する事が出來るであらう。そして、富める者は、貧しき者の幸福を增進せしめつゝ自らの生活を 又同様其祭式と教義との全般に於て、聽衆の注意を次の重要事項の上に集中させなければならぬ。 た祈禱の全部を検討するがいい 故に、僧侶は其小供に與へる教育に於て、其信者に與へる豫言に於て、天に捧げる祈禱に於 人類の大多數は、彼が今日迄享受して來たそれよりはずつと豐富 な 道德的物質的生活を享 法王と其樞機員會議との許可を以つて、カトリック教義に就いて書かれた著作の全部を 衆俗たると僧侶たるとを問はず、 教會の首領によつて信者の諳誦のために捧げら

大量なる書籍中に散布されてあるにすぎない 止まつてゐる。しかも、その僅少なる道德的思想すらも、敎義の本體をなさず、漫然とこ 的な概念の厭ふべき反覆によつてつくられたもので、その中に甚だ僅かの道徳的思想を包 何所を見ても明確に指示されたキリスト教の目的を發見する事は出來ない。それは、何等 のである。故に、 ての概念たるや、反對に、 キリス

の崇高な道徳原理を見失はしめる性質をもつものであった、誰一二。

て彼等を非難してゐる。 第二項目、 サン・シモシは、信者を敷ひの道に導くに足る程の智識を毫も有してる な V こどにつ V

と自ら信じてゐる唯一の科學だ」。 は神學校に於て敬へられる ---の科學だ。 神學は 法王及び樞機官が研鑚を積まねばならん

然らばこの神學とは何んであるか

サン・シモンは云ふ「神學とは教義及祭式に關する疑問に 脱い て論證する科學 である ことを發見す

要なものであった。 又永遠の生命を獲得するために提議すべき地上の大目的、 可及的迅速な改良と サン・シモンによれば、この 何んと いふ使命を信者に見失はせる手段を得るからである。 なれば、 種の科學 これによって、 異端の僧に 彼等 侶にどつては、 は信者の注意を些細な事物の上に 即ち最も貧しい階級の精神的物質的生活 疑もなく、 全べ C 注: · で 最 がせ、 も重

思ふに、 のキリ 意を道徳の上に定めるために、 スト教的僧侶は、 神學は眞のキリスト教的な僧侶にとつてはしかく重要なものでは決してな 祭式や教義は單に宗教上の附屬物と見做し、それは全キリ 屢々有效な手段として使用するに止めるものである。 V スト教 0 である。 信者

ン第十世即位迄正統であつたロー 美術に於て、 精確科學に於て、 マの僧侶が異端化したのは、 又産業能力に 關して、衆俗が 彼等がこの時以來たゞこの神 彼等を凌駕す 3

任せて 貧 V 級の幸福に何等寄與する所を失つて了 つたからである

した上地が、 の利益しか耕作者に與へぬ爲であった。 歐洲諸國に存在する敎會所屬の土地は何れも甚だしく荒廢してゐる。以前に豊富な收穫をもたら 第三の項目 當然この して土地の不毛な爲でなく、 有害な沼澤に化した 職業に從事する事を好まなくなつたのである 法王は 俗界の君主以上 *b* 教會の所有地を耕作する事は、法王の貪慾のためにあまり些 其のまし耕しもせずに放棄されてゐる。しがも、 17 從つて自己の技能を知る者、若しくは、 貧民階級の物質的利益に反する政治的態度を採つてゐる 資本を有する人 この原因た

の成立に賛成し且これ 第四糺彈項目 彼等はキリスト教の眞の精神に全然反する二制度、 を保護してゐる。 宗教裁判所とゼエ ス 1 ŀ

である」(註一三)。 「キリスト教の精神は温雅、善良、 慈悲、 より 以上に誠實である。 その武器は信仰と實證と

會を支配しやうと努めるにある。 とし、暴威と殘忍とを其武器として 宗教裁判所とゼスエット派はこれを全く反對の ねる。 後者の精神は利己主義であり、 立場にある。 即ち前者は、 其目的は奸策によつて社 専制と貪慾とを其精

何故かなれば、 「たとへ裁判者が、貧しい階級の精神的物質的生活の改善に反對したものを犯罪者として火刑に處 たとしても、 宗教裁判の思想は、 キリスト は教會に暴力の行使を禁じた時に、 根本的に罪惡であり、非キリスト教的のものに外ならない。・・・・ 決して例外を許さなかっ たからで

第二十五卷 (四三七) サ ン・シモンの宗教論

を犯罪と見做すことに端を發し 決して死刑に相當する重罪 事質、宗教裁判に として取扱はるべきではなかったも てゐるにすぎない。加 よつて宣言された處刑たるや、常に 之、この違反も のであつた。 たど教義や祭式に違反し 輕微な過失と見らるべきも た事 0

ことを希望すると云ふに止めて 「耶蘇の友」ゼエスイットについ るる。 ては、 サン・シモンは、パスカルの「郷土人の手紙」を參照されん

に反して、 要之、現在の宣敎者は實にキリストの敵である。キリストの使徒達は貧しい者の代辯者であつた 者達の間に僅かに發見しうるにすぎない狀態である。(註一四) 現在の彼等は貧者に對立する富者と權力者との代辯者である。 貧者は、 その保護者を

これがサン・シェンの舊教に對する批判であつた。

質に、社 會の最下級階級の向上を目的とするキリストの妨針に從つて居つた。 過去に於て敎會は異端化してはゐなかつた。少くとも十五世紀迄は、 教會は 町

ある家族から出 殆んごすべての樞機員も サン・シモ ンの表現によれば一 ゐることもあつた。僧侶の努力は、 代々 の法王も、 -を彼等の上位に置く事に不斷に注がれて居つた。 一努力は、門閥貴族の權力と尊貴とを縮少し、「才能の貴庶民の階級から採用され、時には、最も劣等な職業に

てまで るに、十五 「門閥の 世紀末に至ると、樞機員會は全然其態度を變へた。此時以來、 貴族」 0) 上に 「才能の貴族」 を置かう Ŕ しなく 孩 ? <u>5</u>† 教權をして 彼等は最早政權と爭 政權 51 對 + 3

嚴然た 3 一敵國の觀あらしめる となって居つた。 より は 彼等の權力と富と、 その事樂を維持することが、 Ü

この目 的を達成するためには、當然敎權と政權 との服屬關係が生れねばならなかつた。

名を以つてし、人民には、 へ會は、 王の専制権力を建設するために盡力する。 王のための受動的服從の教義を以つてする 即ち、 神の恩寵を以つて彼等を呼ぶに王

保有を要求する。 樞機員會は、 以上の奉仕の代償さして、 戦闘教會の使徒の勤勞の結果である所 有及名譽上の特

これが彼等の交換條件であつた。

レオン十世は、 先づ、神を冒瀆するこの契約を實行に移した。

用されて、法王自らの嗜好と野心を助成するに使用されるに至つて居つたが、尚、表面上には公共 利益のために使ふものであるといよ名目が必らず與へられて居つた。然るに、 彼が、 常初社會に有益な勤勞、例へば橋梁や大道路等の建設の報酬でして與へられた赦罪券は次第に惡 諸侯と同性質の王であることを示す態度は、赦罪券に對して最も明白に表明され レオン十世は、 72 5

逃れ來たギリシャの 俗の君主として自 博學者達は彼の保護の下に安息の地を得た。然し、彼がこの人達を保護した 建築家、 己の享樂と、自己の 彫刻家、學者等を保護した事は、又有名な事實である。 治世に對する人為的光輝の 附加との爲にすぎなかつ イタリー 0 12 12

この收入は彼の妹の化粧費として使用されてゐることを公然と言明した。

の假面を脱いで、

(四三九) サン・シモンの宗教論

政権の世襲的主張に對立する僧侶及貧者の利益とを結合させるために採用することが出來たのであ つた」。(註一五) に向つて行つた躍進は、若し彼が眞質の法王であれば、學者、藝術家及び産業的大企業家の努力と、 サン・シェンはこれに對して次の如く嘆じてゐる、この時代に、ヨ ロッパ精神が凡ての重要な方向

あった。 建設の企圖を抱くに至つたのも レオン十世は、 皇帝に對して、何等の特異性も權威も與へる事が不可能になつた。シャーレマンが世界的王政レオン十世は、法王の位を、それが恰も政治的權力であるかの如く利用した。從つて、法王の位 つに、 僧侶が俗界の君主の野心を防遏する力を喪失したがためで

立ったのである。 新教はかいる時代の要求する改革に應えたものである。 ルーテル は敢然とロー ~ 宮庭に反抗して

他の一部は、ローマの宮庭に指導される宗教とは別箇の宗教建設を目的とするものであつた。 サン・シモンはルーテルの事業を二分した。 彼の事業の一部は、法王の宗教に對する批判であ

を見失はせ、 ルの奉仕は重要なものであった。なんとなれば、一彼が世に出なかったならば、 この事業の最初の部分は完全に遂行された。ローマ宮庭に對する批判に於て、 人間の精神を完全に迷信的思想に隷屬させてしまつたであらう。「註一六 法王教は全く 文明に對するル

£ ーテルの事業の第二の部分は失敗であつた。「再度の改革を受ける必要があつた。」 ンは、 3

と云ふ。 シ ŧ ~ は次の四問題を解剖すれば、ルー テル派が異端であると云ム結論は自然に推論され

のであったか。 「第一、キリストが人類社會の改造を其使命として使徒に與へた時の社會組織の 状態は如 が何なるも

第二、ルーラルが改革を決行した時の社會組織は如何なるものであつたか。

方向にかへるために、法王の宗教が必要とした完全な改革は如何なるものであつたか 第三、ルーテルがローマの宮庭に對して反抗を行つた時に、キリストによつて使徒達に n 72

第四、ルーテルの改革は何によって成立してゐるか。」(註一七)

にすぎなかつた。 た。 未だ小兒期にあつた。社會は主人と奴隷との二大階級に分れて居つた。前者は支配し、後者は隷屬 思ふに、キリストが使徒等に、 道徳體系も宗教體系もなかつた。博愛主義的の感情もなかつた。 極貧階級のために人類社會を組織せよど命じた時代に 愛國主義的感情が存在した は、 文明

つた。 地球の大きささへ知られぬ時代、 それはロー 7 國民が他のすべてを專制的に統治した時代でもあ

の愛と隣人の愛とは、 然るにルーテルの時代には、文明は大進步を遂げて居つた。 法律制定権は行はれなかつた。社會は一個の宗教理論と一箇の道德理論をも 人々が持つ殊勝な一元的感情であつた。 奴隷制度は殆んご廢止された。貴族 所有した。

(四四一) サン・シモンの宗教論

あると認める様になつて居つた。 博愛主義的感情は愛國主義的感情に代つてキ として互に對することは出來ない迄も、 少くとも、 ス 教の眞の基礎となった。 同じ父の子として互に相手を視るべきで 凡ての人々は、たと

人智の擴大を助成したのである。 アメリカの發見、 地球の廣さの決定、 平和 的技能、 即ち科學、 美術、 産業の發展が、 かく 0) 如き

へた。 サン・シェンはこれらの二條件を綜合して、ルーテル は次の如き教理を提出しなければならぬと考

ゆる權力と手段とを盡さねばならね。かくしてこそ、 は神の寵兒であると說くに止らず、最大多數の精神的物質的生活の改善は速かにするために、 真質のキリスト教は天に於てのみならず、地に於ても人々を幸福にしなけれ スト教が成立するのである。「、註一八) 今やキリスト教の理論は完成された。必要な事は、この 始めて「一般的世界的唯一の宗教としてのき 理論の一般的應用である。 ばならない。貧しき者 換言すれば、 あら

彼等は最大多數階級の精神的物質的生活の改善を唯一の義務とし、 貧しい者を壓迫するのを妨げる事を目的をする制度と見做す所にあると宣言しなけれ によって命ぜら でのためには、

教権は

政権に

優る

其地位によって

王位に向って

次の如 凡ての君主に對して、王位を正當なるものとする唯一の方法は、王位を以つて、富者及權力者が n たすべての負擔 は それ *b*; 嚴密に必要でない場合に 又公共財産の管理に於ても、 く宣言しなければ は、 彼等を神 ばならない。 ならぬ。 0

する一つの罪惡であると宣言しなければならない」(註一九)。

下に於て、最も住むに愉快とするために實行すべき計畵を定めねばならね」 然らば 如何に して極貧階級の生活を改善するか 又産業家によって、 人類の所有土地を出來得る限り生産的に いって我々は、 地球の廣 大さを知り得た Ļ 今 凡ての關 H 學者 12

こそ實證的に 最も幸福な社會組織をつくる よつて代表される三つの新しい ものでなければならぬ。 智識部門、 科學、 藝術、 産業、 この三技

には、説得と示教以外の方法を用 人が互に反目對立してゐる社 なる創立者は凡ての人々に對して、互に兄弟となって導き合ふことを命じ、 而して、これらはすべて、力の結合によつて實行され完成されるものである。「キリスト教 互に戦つてゐる場合は、常に、兩者とも誤つてゐる。何故なれば、キリス 會は當然解體の傾向を持つものである ひることを禁じたからである」。「力を作るものは結合である」、各 且其邻論を打切るため ト教の神聖 徙 であ

かくの如きが、ルーテル して思はれ る改革より甚だ劣つた事しか云ひ得なかつたのである。 によって主張さるべきキリニト教改造の要項であった。 然る 17 iv テ

迄逆行させた。彼はセザ リスト教の社會的 て謙譲な請願をする かの 重要性を増進させるために必要な手段をとらず、 権力は他のすべての権力の生れ出る根柢であるとした 々の 力のみを僧 下 17 永遠に幽閉してしまつた。 保留した。 從つて、 彼は平 和的能 この宗

第二十五卷 (四四三) サン・シモンの宗教会

教に還元され、從つて、寺院は繪畵、 對する熱情を喚起しなければならないのに、 第二に、ルーラルは有害な祭式を採用した。 彫刻、音樂が放逐された無意味な宗教的建築物に化して了つ ルーラルによつて改革された教會の祭式は、單なる説 藝術、 科學、 産業の發達を利用して、 公衆の利益に

宗教の祭式のために用ふべきであると考へて居つた。 これは、サン・シェンの希望するものと全く違つて居つた。 彼は、 藝術が提供する凡ての手段を新

まして優越した悦びを與へることを感じさせねばならない 宣教師は藝術の第一歩である彼の雄辯を用ひて、聽衆の魂の中 に公共の尊敬が他の凡て の快樂に

唱隊の朗誦に適する詩篇を祭式のために供給しなければならない 「詩人は宣教師 の 努力を援助しなければならない。凡ての人を互に忠實な宣教師とするやうな合 「音樂家は階音に依つて、宗教的詩篇を豐かにし、信者の魂に深く浸み通るやうな音樂的特性を與 o . .

なければならない 書家、彫刻家は寺院に於て、 基督教徒の注意を最も優れて

* リスト教的な行動の上に引きつけな

感情を起させうるやうに寺院を建築しなければならない 建築家は、説教者、 詩人、音樂家、 畵家、 彫刻家が、自由 に信者の魂に、恐怖、 悦び、 或は望み

新宗教の祭式に與へうる べき基礎はか くの 如さもの でなけ 11 ばならない のにはつ

第三の批難 # ス 教々義に 9 てとつた態度にあった

從つて彼は、 せた社會的重要性 へた偉大な發展にも、 テルは、キリスト教は其起源に於て完全であり、 其注意を全く中世紀 にも注意を排はなかつた。 又彼等が政權の威力を抑制して平和の仕事に從事して居つた 間に教會が犯した過失の上に集め、祭壇の教職者達が文明に與 又其創立以來常に腐敗 して來たと考 人々にかち得さ たった。

みを認め、 うる見地に立つ結果として、 聖書に於て述べられてゐる事以外には、 彼は、創世時代に書かれた書物、 何等の教義も認めないと公言した。 殊に聖書について研究する事の

ばならなかつた。 然し、彼のこの宣言は、數學者や、 それを取扱つた最初の著作について研究されねばならぬと主張するのと同様に不合理と云はね 物理學者、 化學者及其他の學者が、 彼等の研究してゐる科學

サン・シェンは四個の大なる弊害がそこから生じてゐるのを發見した。

- 上學に對する嗜好とを與へた。サン・シモンは獨逸に於て之の事實を觀察した。 此研究は彼等をして實證的な現在の利益に關する觀念を失はせて、 無目的な研究趣味で形 丽
- 相婚の記憶をあばいて想像を汚した。 二、此研究は文明が消滅させた恥ずべき數々の惡德、 例へば考への及ぶ限りの 人獣の交合や近親
- 行しうべからざる平等を社會に建てさせやうとする。 三、此研究は公衆の利益に反する政治的欲望に注意を引きつける。 それは統治者として絕對に官

(四四五) ン・シモンの宗教論

組合 変的感情を示す。 は、文明の狀態に比例 、この研究の結果、 毎年製百萬の聖書を飜刻して公衆に頒布する組合がつくられた。この種の した教理の生産と宣傳とを援助せずに、 人々に虚偽の方向を教示する博

つて確かに準備されたものであることは認めて居つたのである。 を認めたが、新教を以つて、キリスト教の決定的改革であるといる解釋は、之れを拒んだのである かくの如きが、サン・シェンの新教批判である。要之、サン・シェンは、 「新教の道德は現代交明の光明に比例したものではないが、ニキリスト教の改革はル بر ا テルの堅忍な天賦 ーテルによ の才

四

然らば、サン・シモンは如何なる宗教教義を説かんとするものであるか。

諸宗教の批判に捧げられてゐる。 何等體系づけられた敎義を發表してゐない。「新キリスト教」は殆んご大部分が 前 述した 如

と對立して説明されてゐるのを發見するであらう。 我々が彼の宗教體系を求めるならば、 彼の他宗教批判の中に、 彼の新教義が舊教義

若し 「新キリスト教」が保守主義者と改革主義者との次の如き對話、

「君は神を信じてゐるか」

「左様、私は神を信じてゐる」

君は、キリスト教が一つの神的起源を持つてゐると信じてゐるか」

によつて書き初められてゐなかつたならば、「左樣、私はそれを信じてゐる」

何人も見ずに

しまつたかもしれないであらう。

恐らく、

てれをサ

٠ •

シ

£

ンの宗教的著作であるとは

てゐることは豫告してゐるのである。《註二〕其上、前述した如く、 この著に續く、第二、第三の對話を書いて、 尤も、 「歐洲社會平和論」を書いた時と同じく、不完成の姿で公表してゐるのであるから、 彼は彼の抱懐する新宗教については、 その道德や祭式や教義を説明しやうと云ふ計畵を有し この著に書かれた文で止める意思はなかつたらし 彼の時代觀察の直觀に促されて 其點から V

來る不充分は我々も一應認めて置かねばならない。

彼が育くんで來た思想を要約したものにすぎないのであつて、 そう感ずる様に、この書は彼の處女作である「一デーネーブ住民の書簡」から一八二五年に至る迄に 今、本書に於て彼が說くところによつて、彼の説かんとする新宗教理論を構成して見やう。 前に引用したポール・ジャネーの本著に對する批評の如く、 何物もそれに附加したものではない 本書を讀んだ人ならば何人でも

彼の所謂新キリスト教は根本的に二つの部分から成つてゐる。

らない」とい 一は神によつて教會に與へられた道德の原理「凡ての人類は互に兄弟として導き合はなければ

級の精神的 他の一つは、サン・シェンが産業的社會の指導原理として發見したもの、「すべて社會は最も貧しい 物質的生活の改善に力を盡すべきである。 社會はこの大目的を達成するた んめに最も 便

第二十五卷 (四四七) サン・シモンの宗教論

ねばならな

モンは如何にして結合させたかと云ふに、 けた。 彼はこの雨者を繋ぐに

にする産業的勞働的 臺に築かれるに從つて、 從つて、今日 べてを包含し して居つた。 常にすべてを説明しうるものではない。 スト てねるし 社會の指導原理たる道德即ちキリスト教が、 叉 愛主義の道德に この神的な格 に於て この格律たるやサン・シモンによれ ので、 あった(註二三)然し、 は、最初の形式たる前者によつて社會の指導原 律る亦、 よつて置換されねばなら以事は當然である。 社會が天上的、 人間的社會的な表現によつて説明されねばならない 其原理は崇高なるが故に、 直接に人間の精神的物質 ば「キリスト 形而 上的土臺から實證 教に於ける神聖なるも 理 又常に眞理であるが たる務を充分に 的 的生活を幸福 地 上的土 0

つて容易く解決されてゐるのである サン 屢々我 ; · • シ モン はかくの如 が發見する唯物的見地で唯 き見地によ つて兩者の合一を主張したのである。 心的見地との對立と混合とは、かくの如き接合方法 サン ・ シ モンの著作に 12

この意味に於て「新キリスト教」は彼の思想の要約であると云よことが出來や**う**。

成立した 會構成理論が主となつて、他は殆んご附加的のものでしかないのを發見する。 彼の新キリスト教の公式を見るものは、 何人も、 そこには産業組織に 9

業的科學 的威情の上に 單に支へられてゐるのに過ぎない のを發見す 3, 換言す

は、宗教的形式に事 t 12 彼かっ 殆の ん道 だ新らしい す Ž, な V 事 を發見する

のである。 教」に於て 何 者をも 附加 しなかつたと云ふ批判は確かに 成 立つ

從つて、 この事質から次の如 き叱責を彼に呈する事も出來やう。

も通俗的な見地から示さなかつたのか。 「それならば何故に、全思想の目的であるこの理論體系を、先づ最初に宗敎的見地から、最も高

意見を述べてゐる 何故に、宗敎に依つて眞直ぐに人民に向つて行く代りに、産業家に藝術家に呼びかけ巡俗的な見地から示さなかこたのカ 0 12 如 のか き彼の

に依頼しなければならなかつた。 生活を改善することは明かに不可能であることを知らせ、新教理に對して彼等が好意を寄せるやう 「余は、最初に、 富裕な階級の享樂を増進する傾向を持つた方法による以外に、貧しい階級の精神的物質的 富豪や權力者に向つて、 新教理が彼等の利益に反するものではな V

そして「藝術家や學者や産業者の首領に向つては、 彼等は勞働者の階級に屬すと同時に、 に價する唯一の報酬である事を知らせなければならなかつた。 自然その首領である事、 彼等の利益は根本的は民衆のそれ 彼等が行ふ奉仕に對する民衆 と同 一であ

に關しては、そ n が最大の重要性を有してゐる丈に强く主張しなければならなかつた。

(四四九) サン・シモンの宗教論

設が最大多數階級の利益に適するや否やを健全に判斷せ あるからである 故かなれば、 それは國民に對して、 眞に信頼するに足る嚮導者、 しめるに足る嚮導者を與 輿論を指導し、 へる唯一の方法で 又彼等に政治的施

教に有力な援助を與 彼等が誤つた道を歩み初めた時代を精確に知らせなければならないからでもあつた。この點に關し 「最後に、カ 又張く反覆する必要はあつた。 トリック教徒に對 へるものであつた し、 又新教徒に對して、 何故なれば、カトリッ からである」(註二三)。 彼等をして容易に良き道に返らせるために ク教及新教の僧侶の改宗は新キリス

のである。 彼が自己の理論を最後に宗教的支點の上に立たせたのには、 かくの 如き彼の思慮が働い て居つた

なる。 サン・シモ は「新 # リス ŀ 教」を結 ぶに際して、 敢然として次の 如 き進言を世 の君主達に與 ^ ч.

キリスト教の名に於て一致 る軍隊や貴族や、 會的幸福を及ぶ限り速かに増進する 日〈 と(組二四)。 余の口を通して貴下達に物語る神の聲を聽け、 異端の僧侶や邪曲な裁判官達を貴下 彼が權力者に課した一切の義務を果するとを知れ。 ために、 全力を盡すべしと彼に命ぜられてゐる事を貴下達は記 の主要な支持者として尊重することを止めよ 再び良きキ y ス ŀ 教徒となり、 貧しい 給料を受け 人々の社

Ŧ

面から云へば宗教以外のものでもあつた。 依是視之、一新キ ŋ ス ト 敎 17 於て 說 b n τ ある學説は、 甚だ新らしい形式の宗教學説で は ある 3

ねる y スト 教しの 初めに於て、サ シ モン は、「私は神を信ずる」と云ふ粗暴な一言を投げかけ Т.

「人は互に兄弟 てゐると云ふのが彼の意見であるからである 彼が云ふ神 0 なるも く導き合はねばならぬ」と云ふ最高原則はキリスト教の神的要素を一切包含し 0 は、 質は、 っっ の道德的教訓以上のも のを意味しな V 何んとなれば

業と科學とによつて、それから生ずる物的效果を相互に與へ合ふ事によつで、人は兄弟の如く 合はねばならぬと云ふのである。 ~愛せよとは云はない 然らば如何に して人々は兄弟の如くなるかと云ふに、サン・シモ 慈悲善行によつていつくしみ合ふのではなく、勞働することによつて、産・は兄弟の如くなるかと云ふに、サン・シモンは慈悲や善行によつて兄弟の如

換言すれ 的改良及利益に於て、全く地上的な實證的な仕事によつて完成されねばならない ば この人間愛は、 信仰や慈善の行為によつて完成さるべきでなく、社會の一階級の物 と云ふ 0

生活を改良するにある」と云ふ實行的な第二の實證的道德に轉化されるのである 教の神的基礎原理は、 か くして、「社會の目的は最も貧しい最大多數階級の物質的 精神的

スト教」 が一切を最高の見地、 即ち宗教的見地 から統 しやうとした努力の結晶

第二十五卷 〈四五一〉 サン・シモンの宗教論

第三號 一四七

あることは確かである。

理由文で、 我々はこれ を純然たる彼の宗教的勞作であるとは認め難い

式上これが宗教的著作であるかの如く見えても、 にあ つたからである 彼の思想の中心は 依然さして科學的 產業的

れ程の は少しも有つてゐなかつたのである 忍耐を以つて開拓した科學的 「新キリスト 教」を編輯するに當つて、三十年の間、 質證的見地を去つて、 抽象的な思考に耽ると云ふ様な希 彼があれ程の研究と、

ため て發見するが、 形式を採用 發表するに當つて、 次の句の如きも其一つである したにすぎないのである。この證據と 彼が宗教的形式をとつたの 思は は、 れる箇所を、 この著を完全なるも 屢々、 我. は 0 彼 71 0 す

即ち、サン・シモンは「新キリスト教」の一節に於て次の如く述べてゐる。

上 今日支持されてゐる 及産業の各種の哲學的考察の上に、又、文明世界に最も普遍してゐる宗教的感 教の原理を發表した新公式は、社會組織に關する君の全體系を包括してゐる。そ ر مح

又、「萬有引力研究」中には次の如く一句を見出す。

「キリスト教 は * y ス ト放を物質の世界の外に置いた。はアプリオリイの宗教であつた。 キリ 彼 は ノス 4 ŀ n 教はプラ r 0 世界に ŀ ~ 的哲學の宗敎的變形であ 0 办 ? 51 遍的新

教運動は、 一の地位、 説を特質づ 從つて、特種利益に、 るべ 71 き見地 7 は、 ら二つの見地を包 の重要性を與へねばならぬ z n 種考慮に、 に反し τ 特種感情 有しなければならぬ。それらを同一の地位に置かアフリオリイとポステリオリイの平等であつた アプ 17 رِّ بح د 全體的感情、 ષ્ટ 全體 的思想、 全體的利 ねばな 益 新宗 8

とを同一の位置に認識しやうさする彼の努力の變稱なのである。 新キリスト教は、 質に、最良の社會組織を樹立するために必要な 切の理論の綜合、 精神 ど物質

單なる變形を不精 れねばならね 要の急進さを公然と發表する代りに、一新哲學の必要を公言しなかつたのか、又、キリスト敎の (精神と物質)を一つの統一 過去のごの宗教よりもすぐれて 確に且臆病に公言するのに限定したのであるかと云ふ非難が、サン・シモ 一に包括し 勝結すべきであるとするならば、 包括的であると同時に、 より以上深奥なる新宗教 何故に、 新宗教の成立 ~ は、 17 0

せられるこの種の非難に對しては、甘んじて之を受けねばならないであらう。 の「新キリ スト キリ スト の單なる改革思想にすぎない事に よつて人々 から發

7 のみならず現在に 集の編者は云ふ ない 一祭した變化は平和でなければなら 彼は、 「我々はこの行程に於て「サン・シ しても 數ヶ月前には正しく、思想に於て、 活潑な攻撃に よつてそれは かが、 モン 急激でなければならぬ、 行はれ 0 感情に於て、又歐洲の利益に於て準備 いつもの様な卒直さも、 てゐると公言して居つたのに」、誰 そして、 又勇敢な態度 過去に

第二十五卷 (四五三) サン・シモンの宗教論

化されてゐるキリス する文では その道徳をも 僧侶が聖書の示す方向 キリスト て充 ればならない 分でなかつた。 数が排斥すべきものであり、 の的としなければならなかつた筈である。 によつて堕落してゐること、 から遠ざかつてゐること、 ものは、 一歩進んで人生の二方面の一つ即ち精神的 かん * 不完全である事を明示すべきであ 俗世權力によつで汚辱されてゐることを攻撃 彼等の執行する儀式の無意味な ト教の獨斷説や儀式に限定すべきでなかつた 成程、サン・シモンは前 方面に於てのみ神聖 った。 事を攻撃し 述した様 72

ば良いので、 リスト教からの單なる抽出であるべきであるといふ事及、その原理が時代の文化に適應しさへすれる。然で、他かキリスト教を完全に抹消し得なかつたのは、彼の胸中に、近世の宗教運動は原始キ 然るに、彼がキ 敢えて宗教の消 リスト 教を完全に抹消し得なかつたのは、 滅を説く要はないとい ふ思想が根弧く存在して居つたからである。 彼の胸中に、 近世の宗教運動は 原始

この意見は、「新キリスト教」の序文に於て、サ グによつて極めて明瞭に示されてゐる。 ン・シェンの本書に關する遺言とし て、オランド

を得たし く述べてゐる。 ŀ, リーグは「哲學的精神から宗教的感情への過程として私が之れを作成し、サン・シ と云ふこの緒言に於て、「新キリ スト教」に 關して臨終の床で發した最後の言葉として Æ ン の承 次の

「吾々の研究の最後の部分は恐らく誤解されるであらう。 か證明 な b ク 12 即ち、 それは最早實證科學 0) 1 1 進 世 步 紀 とり 一致し 宗教組織を攻撃す 了 加 つ 12 8 る場合 V ム事であ である。

8 一致しなければならぬ云々」と〈註二六〉。 組 織が 全然消滅 でしなけ ばならぬと結論す るの は恐ら 誤謬であらう。 12 1, それは

頭に告白し たのである 底にあるこの考を、 最も古いが、 且最も新らし V 人間 の言葉で 新 # y スト 敎

信ず」といふ答がそれである

た。故に つた事 は前述した通りである 「私は神を信ず」と冐頭して の潮から離れ得なかつた彼は、「その神 書初めたに 拘らず、 は何者であるか」 說 くどころは一種の道徳的教訓 と再考する餘裕を持た 12 過ぎな なか 9

出來たであらうと推定する事は可能である。 死んだ彼には不幸にして、 説明しやうと思つて居つた著作の寧ろ最初の一部分に過ぎない 彼に藉す に尚幾分の時日を以つてした それ丈の餘裕がなかつたのである。 何 ならば、 んとなれば、本書は、 彼の宗教論にも 彼が自己の宗教的思想を秩序 からである。 より以上の發展を見る事が 本書刊 行後

取扱はれ ンファン この書は、サン・ そこから シモン 宗教の要素を抽出した。 の著作中、 最も 驚異すべきものであらう。 この書は彼等には聖書の オラン 如 1, 11 ۴ 福音書の如 8

ニアン の公式

「すべての社會は 最貧階級の サン・シモンの宗教論 物質的精神的存在の改良のために盡すべきである。社 會はこの偉大 五

第三號

核心的思想であつたのである。 的を行ふために最も都合よき様に組織されねばならね」、 は、質に本書に於けるサン・シモンの

者であつた。 この場合の勞働者といふ概念は、貧富二つながらを包有した産業に從事する大衆を意味する は「組織者」に於て、 既に勞働する者と有閑者との間に確然たる區別が布かれたのを見た。

押し出され 然るに、本書のこの公式に於ては、勞働するものの中の眞の無產大衆が初めて政治的 た、「道德的自活權を有つ一つの範疇として」の資格で。C註ニセン 光景の前

向上を計る事を治者の本質的仕事としやうとしたのである。 換言すれば、サン・シモンは勞働者を監禁して居つた鐵鎖から彼等を解放し、 且彼等 の物質的精神

サン・シモンの社會主義への道、プロレタリアへの叫びは、 てゝに開けられたと云つて V であら

サン・シェンの晩年の生活は半ば幸福なものであつたが、短かかつた。

ducteur について友人達と企畫する丈の力は持つて居つた。 la conquéte de l'Augleterre par les Normands を讀む力、 は一八二五年四月の終りに病を得てゐる。 然し、彼は尚、オーガスタン・チェ 及彼の死後數ヶ月に現れた評論 Pro IJ 0

彼の病篤しと見たロドリ 月十九日にガー ≥ (Gall) とブルウセエ (Broussais) を呼んだ。

が病床につめた。然し彼の病は如何ともしガールは最初に、次に銀行家のアルドアン 何ともしやうがなかつた。 ルドアン (Ardoin) 博士ブ ルウ 也 エ・ビリイ (Billy) 及びユ ルグン

サン・シモンは臨床の床に於て、「病の苦痛の事以外に事について語らねばならぬ」 に語つた。 と云つて次の

ことである」と、 生涯の仕事の要約、 「何か偉大な事をするた めに は感激しなければならないといふ事を記憶しておい それは社會の全員に、彼等の能力の發達のための出來る丈大なる廣さを與へる てくれ。 私の全

此言葉は、 又彼によつて語られた彼の生涯の最も短か い要約でもあつた。

サン・シモンは又彼の床をめぐつてゐる友人を集めて、 次の様にも云つた。

着してゐるといふ事である。 私が云ひ得るすべては、よく結合された努力が最も大なる成功を持たねばならぬ一時期に諸君が つて務めて居つた。そして二時間の間私はこの點について私の考を纒めて諸君に示さうとした。 「この二日間、私は諸君の企に對する諸君の努力を出來る丈よく結合する方法を諸君に示さうと思 梨は熟れてゐる。そして諸君はそれを採取すべきである」と、

ければならぬ。そこに新宗敎が生れる。その時期が今來てゐる」といふ彼の意見である。 して云ふ「梨は熟れてゐる。 梨は熟れてゐるとは、「旣成宗敎は、實證科學の進步と一致しない宗敎は、科學の進步と一致しな 諸君はそれを摘せねばならね。 四十八時間後で我々は一黨となるだら 彼は繰返

(四五七) ታ ン・シモンの宗教論

あると確信して居つた。 飽くまで理想主義である彼は、我々が將來に希望するものを、 彼が息を引きてつたのは五月十九日の夕であった。 四十八時間後の現在に於て可能で

アン(Julian) は數日後サン・シモンの庶子に次の如き數行の手紙をかいてゐる。 月二十二日に行はれた。葬儀には、コムト、 ガールは彼の頭腦を解剖した。そして大腦に思慮と忍耐を示す偉大な外面を發見した。 チェリイを初めとして友人はすべて會葬した。 葬式は五 ジ ユ

天才の墓にも、 此事は偉人として彼を認めることを少しも妨げはしない。 餅も称號もなく、 「私はあなたの名と私の名で、一つの花環を持つて Pére-Lachaise に行つた。 他の記述がないから習慣である様です」と。 一八二五年五月十九日死す、サン・シモン、 モリエー 當年六十五才としるされてあつた。 IV 、ラ・フォンテー 墓石の上には何の頑 又 及其他

寫字生、ラルセエーナの圖書掛、十九世紀の政治運動家及祉會哲學者であつた。 り得たこともあつた。然も、其反面には貧窮のために正に死なんとさへした事もあつた。 且サン・キュロットであつた。 聊の經驗であった。 サン・シェンの一生は完全した一生とは云ひ得ない。 いた ーブリアン、 らフランスへと、彼は其精神と同様に不屈の健脚を以つて、 バンジャマン、 彼は、兵士、 とに、 和崩に、 彼は莫大な富を識つて居つた。そして、 投機家、 コンスタンの如く旅行家であつた彼は、 ドイツに、 織物職人、荷物運送人、 スイスに、 然し、彼の云ふ如く、 スに、 葡萄酒小賣人、モンラ・ピエテの 北から南へ、 かつては流行界の王の一人た アメ 職から職 たしかに彼の一生は カに、 思想と社會と、 彼は大貴族であり メキシコに、 デカルト 國から國

人とを尋ねて歩るき廻つた。宛然走馬燈の如き變化を見せた。

殿の連續と集積は確實に有效であつた。 會制度の改革を果すためにはよく視察しなければならぬと感じた彼にとつては、 かくの如き經

問はず、 かつた」と(註二八)。 C に亙つて引かれてゐるのを見る。敦世主としての彼の思想がそれである。 めに、 ゐない事はなかつた。 しかも 了解するために、 最大多數を有する極貧階級の味力であると云ふ意識は、 我々は १८ V 特に人にそれを教えるために、 キシム・ルロアは云ム「彼の如く、人類の幸福のために有用な秘密を知る 共の變移の飢雑の中に、 それを綜合する一つの强い紐が彼の全生産 あれ程の熱誠さを以って生活した人はな 一度も、 彼の心、 富める時と貧しき時とを 彼の著書に現れ

「新キリスト教」は、この總結論であつたのである。

- 1 G. Weill, Saint-Simon et son oeuvres. p. 181.
- 三田學會雜誌第二十二卷第六號「一ヂュネーブ住民の書簡」に現れたサ ンの思想参照
- 三 ボール著「サン・ション及びサン・ショニズム」大岩誠譚、六九頁。
- 註 四 三田學會雜誌第二十三卷第二號「サン・シモンの歷史哲學さ人類の科學」参照。
- 提 月 Saint-Simon, Oeuvres choisils vol. I. P. 223.
- 出 六 Saint-Simon, op. cit., vol. I. introduction LXLLL.
- 盐 七 Saint-Simon, op. cit., vol. I. intro. LXIV.
- 註 八 ibid, LXV.

第二十五卷 (四五九) サン・シモンの宗教論

ポール著、前掲書、一〇三頁。

- Saint-Simon, Nouveau christianisme (Bibliotheque Rhombus) p. 6.
- Saint-Simon, op. cit., p. 18.
- Saint-Simon, op. cit., p. 20-21.
- 計二三 Saint-Simon, op. cit., p. 25.
- 能 能 能 一 二 二 六 五 四 Saint-Simon, op. cit., p. 26-27.
- Saint.Simon, op. cit., p. 33. Saint-Simon, op. cit., p. 31.
- Saint-Simon, op. cit., p. 35.
- 註一八 Saint-Simon, op. cit., p. 38.
- 註九 Saint-Simon, op. cit., p. 39.

註二〇

Saint-Simon, op. cit., p. 47-48.

- 計二 Saint-Simon, op. cit., p. 65.
- 能二二 Saint-Simon, op. cit., p. 9.
- 註 二 三 Saint-Simon, op. cit., p. 61.
- 註二四 Saint-Simon, op. cit., p. 69-70.
- 註二五 Saint-Simon, op. cit., intro. IXXVII-VIII.
- 匙二六 Saint-Simon, op. cit. p. 1.
- 註 記 二 八 七 Maxime Leroy, La vie du comte de Saint-Simon. p.

	・ジュー・エス・シルの經濟學方法論	プロレクリャ 獨裁説 (を) でランキの階級闘争説な	①「詩博」社會主義に論戦が	前 號 ^(発生)
	濱田	政 一般 一个 一种	型 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	競り
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一	電子 一般 りょう 一般 りょう こうしょう かいましょう かいましょう かいましょう かいましょう かいましょう かいしょう かいしゅう かいしゅ かいしゅう かいしゅう かいしゅう かいしゅう かいしゅ かいしゅ かいしゅ かいしゅ かいしゅ かいしゅ かいしゅ かいしゅ	就 傳 禁 数 章 第 6 至 5 年 5 年 5 年 5 年 5 年 5 年 5 年 5 年 5 年 5		● ● ● ● ● ● ● 年 ※ 一 ヶ ヶ 年 年 年 年 年 年 年 年 年 年 年 年 年 年 年 年 年
東京芝河田	國	印刷所金子、活版所即引擎市赤坂區新町五丁目四十二番地東京市赤坂區新町五丁目四十二番地路、子鐵五郎	東京市党區当田三丁目三番地と唯義塾内で印象が行の前月十日限一日夜行別日は發行の前月十日限	● とは、
理財學會	店でで販賣する。一個では、一個では、一個では、一個では、一個のでは、一個のでは、一個のでは、一個のでは、一個のでは、一個のでは、一個のでは、一個のでは、一個のでは、一個のでは、一個のでは、一個のでは、	下。 一方。 一方。 一方。 一方。 一方。 一方。 一方。 一方	三番地 慶應義 塾内 日 一日 一	川仲は殺行所宛。世代は殺行所宛。世代は殺行所宛。世代の世代の世代の世代の世代の世代の世代の世代の世代の世代の世代の世代の世代の世